

「最終回にあたって」

平成二十五年四月号(第九十七号)より始まった「宍粟 歴史 再発見」では、宍粟市の古代・中世・近世・近代に関するさまざまな話題を取り上げて紹介してきました。

まず、平成二十五年(二〇一三)度は、「黒田官兵衛と宍粟」「風土記と宍粟」「宍粟の地名の起り」「城下町成立の頃」など、宍粟にまつわる歴史的な事象や、伊水小学校裏手で発掘が行われた「宇野構遺跡」、「篠ノ丸城」のレーザ測量の調査結果などを紹介しました。

翌年からは、年間テーマを設定し、連載を行いました。



第1回のテーマは「黒田官兵衛と宍粟」でした。

平成二十六年(二〇一四)度 『播磨国風土記』

この年は、播磨国風土記の編さん一三〇〇年にあわせ、風土記にまつわる史跡や伝承などを紹介しました。特に「宍禾郡を巡る」と題して、播磨学研究所の埴岡真弓さんに執筆いただき、十一回にわたり七つの里の地名の由来や神話を巡ること、身近な風土記の世界に触れていたことと思えます。



播磨国風土記で活躍する伊和大神を祀る伊和神社

平成二十七年(二〇一六)度 『江戸時代の宍粟』

続く平成二十七年度は、播磨五十二万石の姫路城主池田輝政の四男である池田輝澄による宍粟藩立藩四〇〇年に因み、テーマを江戸時代の宍粟に設定しました。

池田輝澄の人物像や山崎城下町の成立と変遷、江戸時代の文化、たたら製鉄などの産業、揖保川水運による流通などにも触れました。また、延宝七年(一六七九)に山崎に入封した本多忠英以来、明治維新に至る

まで八代にわたって山崎藩主を勤めた本多氏の事績も紹介しました。

平成二十八年(二〇一六)度 『近代の宍粟』

そして今年、明治時代以降、市内各地に築かれた遺産や、宍粟出身の力士朝日嶽、明治大正期の宍粟の行政について詳細に書かれた「宍粟郡役所文書」、そして宍粟で隆盛を誇った一宮繁盛地区の鉾山などを通じて、現在の宍粟市の発展の礎となった近代化の足跡を辿ってきました。

宍粟市内には、本欄で紹介した文化財や史跡以外にも多くの歴史文化遺産が伝えられています。

これらは地域の成り立ちや特徴を知るうえで貴重な資料であり、適切に保存を図ることはもとより、観光や地域づくり、人づくりの資源として活用しながら後世に引き継いで行かなければなりません。

本欄の記事を通じて宍粟市の歴史や文化に関心を持っていただき、地域に愛着と誇りを持っていただくきっかけとなれば、所期の目的の一端が果たせたとと言えるかも知れません。

「宍粟 歴史 再発見」は、今回を以て最終回とさせていただきます。皆さんには、長い間ご愛読いただきありがとうございます。

編集後記

北部ではまだ大雪の残雪を見ることがありますが、宍粟市に春の訪れを告げるアマゴ(溪流魚)釣りが解禁され、道の駅などではフキノトウなどの春の山菜が店頭を賑わしています。いよいよ春到来ですね。春といえば新しい生活をスタートするにふさわしい季節です。新たなスタートのその先には、新たな出会いも待っています。来年度ももっとたくさんの皆さんと出会い、市民にとって身近な「広報しろう」をめざしていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

眞